

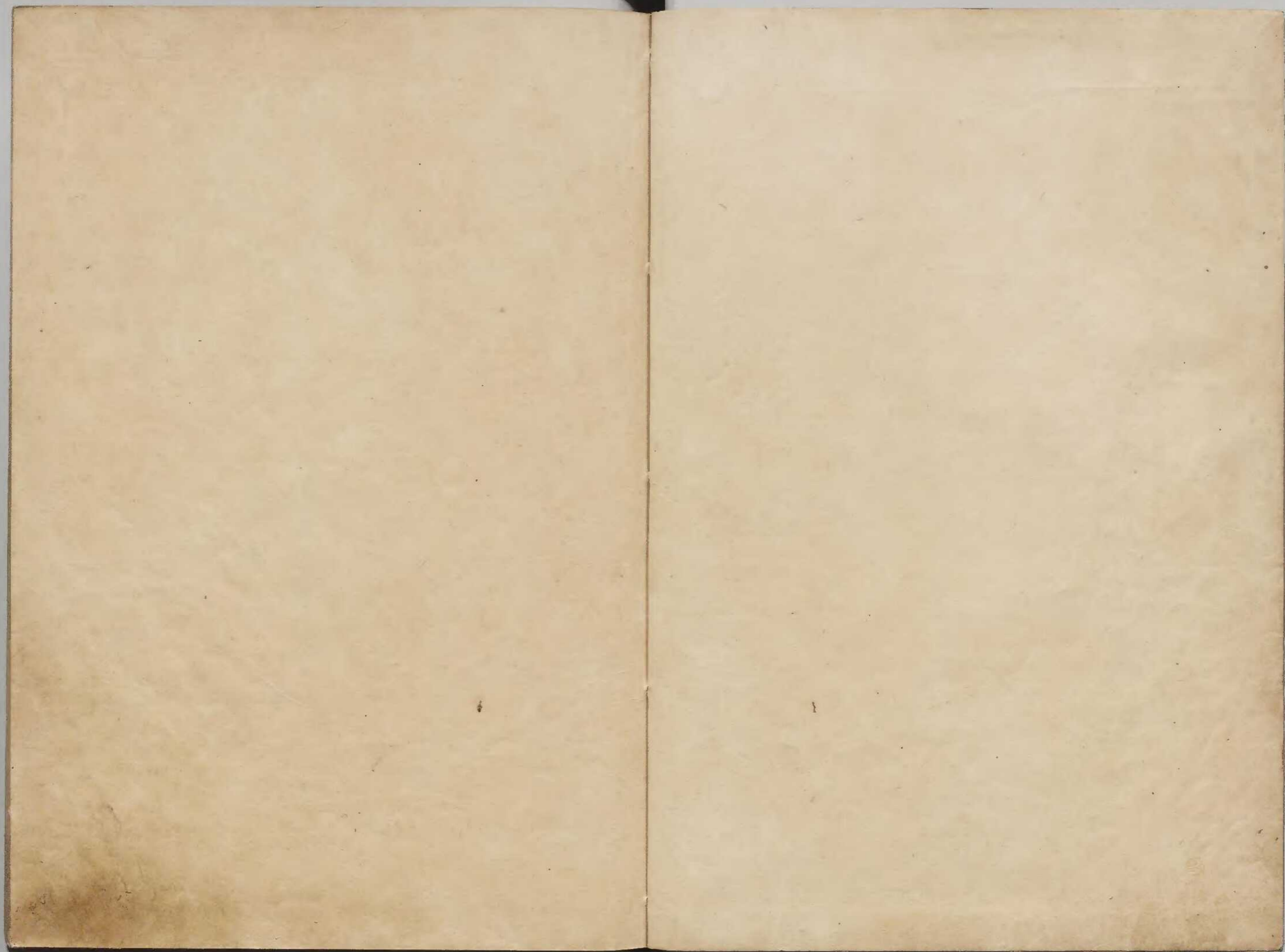
寛永諸家譜

清和源氏辛七冊之内
義光流之内小笠原

50

内閣文庫	
番號	和 20199
冊數	186(50)
函號	特 76 1





長坂 日向
 内山 山中
 窪田 日比野
 と井 高室
 市川 五十嵐

寛永諸家系圖傳

清和源氏

義光流

長坂

家傳ト小笠原ト北条流トトシト傳ト

辛六

淺草文庫

信政

先立郎

出圖三列

後ト血錢九郎トトトトト

清康若廣忠卿

東照大権現（清人なり）

清康若此沖時教友の沖陣ニ毎夜
軍功とてげましとてく銚とのせ
敵とて子つらふ人 清康若血銚九郎
と名とつてあはるふ

信宅

先考

ちや利九郎 生玉同お

大権現（清人なり）懸河姉川も原小山
長久手此沖陣ニとてくひなりと教
友此働ここれなり

天正十年甲列陣の時織田信長ハ
本居路より甲列へおりしとたまひ

大権現ハ駿河にり沖陣のとき
後列に鹿の城ニ甲斐の宮山梅雪密
通の沖つてて信宅と梅君と
は、いさくも此に鹿城へ志のひも

五方^{このち}の^ち城^ち小^こと^とま^まり^りて梅^う雪^せと^とひ^ひ
勝^かれ^れ小^こと^とま^まり^りて^て先^さと^とま^まり^りて

大^お指^さ現^げ甲^か列^{れつ}一^{いつ}沖^{おき}を^を教^{おし}と^とゆ^ゆく^く落^お居^ゐ
せ^せし^しの^の流^{なが}ひ^ひ沖^{おき}と^と流^{なが}の^の初^{はつ}梅^う雪^せと^とた^たら^ら
こ^こと^とま^まり^りて^て梅^う雪^せ信^{のぶ}宅^{たく}よ^よひ^ひら^らり^り
ハ^ハ信^{のぶ}と^とま^まり^り梅^う雪^せと^とま^まり^りて^て先^さと^とま^まり^りて^て
少^すく^く米^{こめ}地^ぢと^と信^{のぶ}宅^{たく}と^とま^まり^りて^て先^さと^とま^まり^りて^て
う^うく^く一^{いつ}先^さ後^ご列^{れつ}清^{せい}水^{すい}と^とま^まり^りて^て先^さと^とま^まり^りて^て
此^{こゝ}地^ぢと^とま^まり^りて^て先^さと^とま^まり^りて^て先^さと^とま^まり^りて^て

と^とま^まり^りて^て先^さと^とま^まり^りて^て先^さと^とま^まり^りて^て
先^さと^とま^まり^りて^て先^さと^とま^まり^りて^て先^さと^とま^まり^りて^て

大^お指^さ現^げ信^{のぶ}宅^{たく}が^が武^ぶ略^{りやく}と^と感^{かん}と^と流^{なが}ひ^ひと^とま^まり^りて^て
列^{れつ}首^{くび}我^{われ}に^に在^あり^りと^とま^まり^りて^て先^さと^とま^まり^りて^て
毛^け二^に村^{むら}と^とま^まり^りて^て先^さと^とま^まり^りて^て

同^{どう}十^{じゅう}八^{はち}年^{ねん}小^{せう}田^{でん}原^{げん}陣^{ぢん}の^の村^{むら}
大^お指^さ現^げ此^{こゝ}命^{いのち}と^とま^まり^りて^て先^さと^とま^まり^りて^て

却^{かえ}陣^{ぢん}と^とま^まり^りて^て先^さと^とま^まり^りて^て
同^{どう}東^{とう}沖^{おき}入^い玉^{たま}の^の後^ごと^とま^まり^りて^て先^さと^とま^まり^りて^て
同^{どう}東^{とう}沖^{おき}入^い玉^{たま}の^の後^ごと^とま^まり^りて^て先^さと^とま^まり^りて^て

同十九年奥列陣の^{ろくろ}鉄砲頭と
 たりて忠務に^{くわ}屬して内地^{のち}を^たび
 信宅^{のち}を^た後小忠務^{のち}より^か本多^{のち}雲守
 が^ま居^{のち}味上^{のち}総^{のち}玉小田^{のち}喜^{のち}城^{のち}より^たりて^た務
 が^ま累^{のち}松平^{のち}右^{のち}衛^{のち}門^{のち}が^まを^た治^{のち}八^{のち}幡^{のち}臺^{のち}輪^{のち}より
 任^{のち}寸
 是より十二年^{のち}病^{のち}死^{のち} 年^{のち}六^{のち}十^{のち}七

信長

権七郎

生国用前

台漣院殿（一）法のちりのち

天正十八年

台漣院殿後府より小田原より新のち發のち向のちのち府

任寸

文禄四年病死

忠尚

秀五郎

名のち利のち九のち郎

生国用前

本多内記が水のち尾のちよりのち

槍七郎

生國同家

寛文二年

名瀬院殿一わー一上（？）先達（？）名（？）道（？）次（？）

と存領寸

同五年真田沖陣（？）此（？）記（？）

名瀬院殿本曾路（？）と存（？）く（？）う（？）き（？）沖上（？）

海北（？）と（？）き（？）道中（？）沙（？）情（？）と（？）初（？）む（？）大坂（？）と（？）く（？）

本曾路（？）此（？）人（？）代（？）出（？）つ（？）く（？）あ（？）つ（？）り（？）一（？）時（？）

一正沖慶養（？）と（？）く（？）て（？）銀子（？）と（？）存領寸（？）

同十九年大坂沙陣（？）の付（？）松平（？）母後（？）と（？）

組（？）と（？）く（？）存領寸（？）

之和（？）之（？）道（？）大坂（？）事（？）乱（？）の（？）記（？）ハ（？）伏見（？）此（？）取（？）

城（？）沙（？）番（？）小（？）つ（？）ら（？）く（？）松平（？）母後（？）と（？）同（？）

一（？）く（？）伏見（？）一（？）在（？）番（？）と（？）

く（？）此（？）後（？）

將軍家一流人なり

寛永十九年沖鉄炮頭（？）と（？）なり

信次

榮利九郎 生玉を列

寛文十四年後裔よおわく

大権現(信次)が子れりしとしつゝし人

り小つさめし出さる

同十六年小十人組なり

大坂毎度し法陣し軍しと勤し此

のり

名徳院殿(可)つつ道を習し御書

と流とむ

寛永九年四月七日

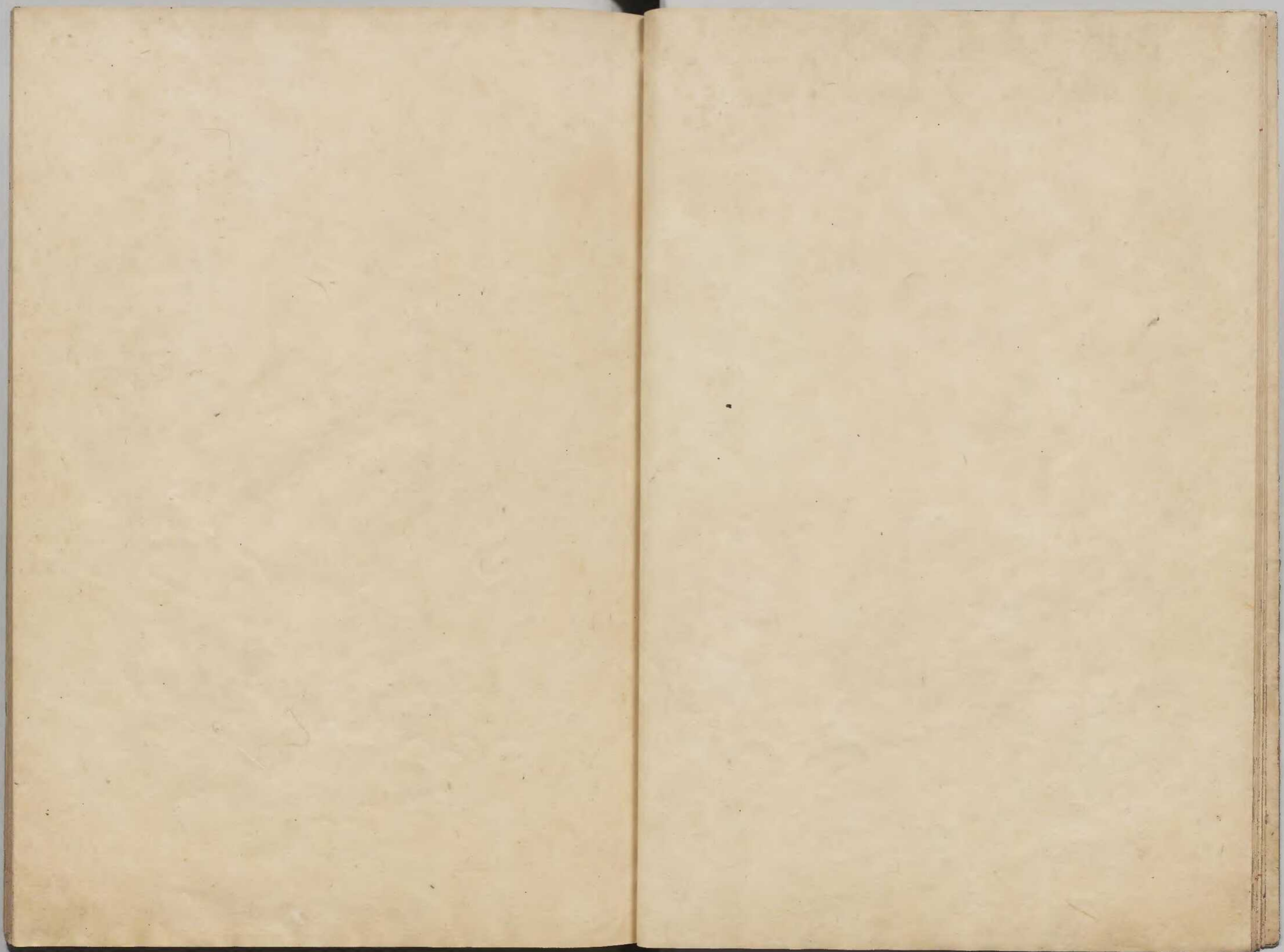
為軍家此命しり小十人組此頭なり

同年十二月 釣命しり布を懸し提

りさる

同十五年十二月十日御鉄炮頭なり

家紋の内し文字義



● 猪名

津見傳傳門 生玉之列 法名全圖
廣忠卿 (法名) 也

長坂

中名、津見名門時よりして長坂
と河へ心

名次

孫右清

生玉同名 清名宗憲

安永五年閏ヶ原沖陣の初手
上野分村越茂の養者少く

大権現一 出さる

台酒院殿

將軍家一 清人なり

名利

右坂孫七郎 生國成彦

右坂と稱するもの母は伯父右坂

三十郎

大権現一 清人なり

清人の金母衣れものなるは金利

幼少より右坂と稱号とす

台酒院殿

將軍家一 清人なり

家紋の用ゝ
松皮まきかわ巻

占坂

● 皇居

次右邊門村

生國三列

柴田修理亮務家之流

大坂少く一向宗略起のとき野田

福満少く討死す

清房

次郎右衛門尉生玉同前

天正十九年

台徳院殿(石出)之

將軍家(石出)之

正房

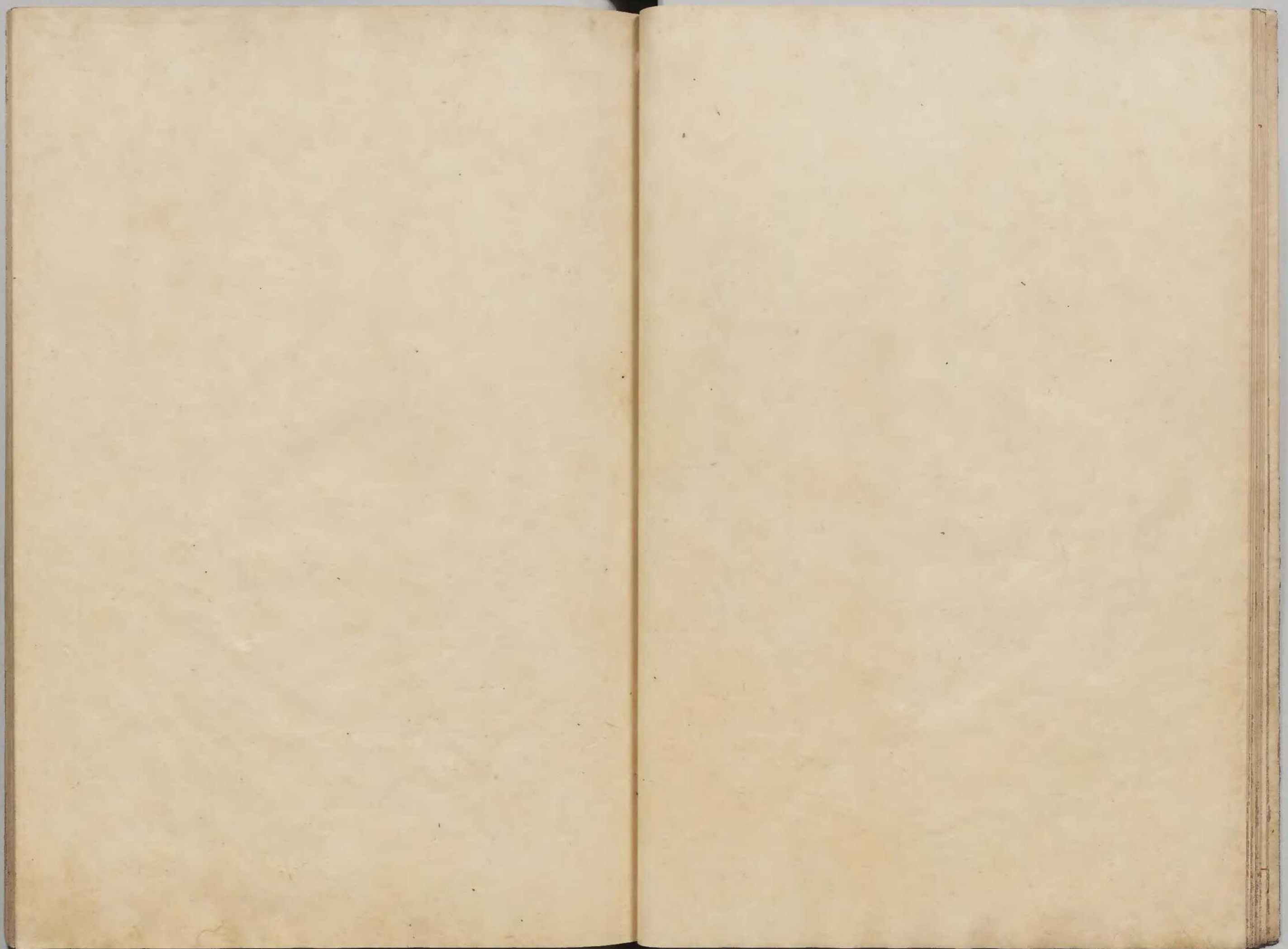
次郎右衛門 生玉武藏

寛永八年

台徳院殿(石出)之

將軍家(石出)之

家紋



日向 ひなた

神のハ新津 にらぶ

● 系 まが

にらぶ 新津 まが 系亮 まが 生國 まが 信列 まが 佐久 まが 班
まが 上松家 まが 上津 まが 下津 まが 列 まが 岩村 まが 田 まが 小 まが お まが あり まが 討死

系

右系亮 父と同日 まが 討死年三十二

系

日向玄東母 生玉同家
幼少して父母を失はれ祖母の家へ
なつる祖母は武田信玄の家人日向大和守
か母なり是ありて新津と仰ぐとあり
日向と稱す新津の家級は松皮
養たりと仰ぐも信玄より割養有羽
と仰りて仰ぐとあり

寛永十三年五月十四日八十七歳にて
死去 法名宗立

政成

傳次郎 半若流 生玉甲斐
天正八年二月より臣列戸倉の城主
松田新次郎と小栗左衛門伝合戦乃時
政成甲列より戸倉へおこむるに新次郎
より流りて先陣よりみく鏝との

い寸翌日敵より矢を射し討て政
成が働とたつこ一組に新ちくくりく
政成が働のやう寸事流け敵より流る
寸

同九年五月廿六日武列鉦鼓の告甲
列湯野多伴社へ言より城郭よりま
増起寸時不

東照大権現此後より是初次第左流の射
首録下野多と流るはるの時政成あ人

此より属一先陣よりすみく首級
らとり

同年五月廿六日甲列見坂より一揆
起のとき是初次第左流の首録下野多
より属一先陣よりすむ

同年七月十日の信列あ山北城より
刑部等一揆をおこすは首録下野多
より属一軍初より

同年八月八日の信列望月より一揆の時

若田右衛門正自（若田）の属（若田）——甲斐の城を
防戦（防戦）——首（首）一級討（討）たり

同年九月信州若田子頼田森忠尾
あゝ一揆蜂起（一揆蜂起）のとき若田子頼田
にて敵二人うらりたり

同年若尾筑摩川陣の時真田安房守
曾孫下野守が自ら討つて先陣となり
同此也

大権現（大権現）——おきれらるる家よ政成が母——

甲列竹居村と治ふ

同年十一月十の神々

大権現と有（大権現と有）——

同十一年閏二月十日 釣糸（釣糸）あゝ

後列少く厚原甲列小おろく竹居村
と有（と有）——

同十二年四月九日尾列（尾列）古久在津陣の
とき松平忠房の従（従）——先陣と
さみ首（さみ首）二級と討（討）たり

大権現沖出陣のとき毎夜行なふ
寛永十九年

大権現より足輕五十人改成一つに
文和四年

台漣院殿と同心十騎とつけたまふ

政次

徳右衛門尉

元和元年二月初め

大権現とある湯一草

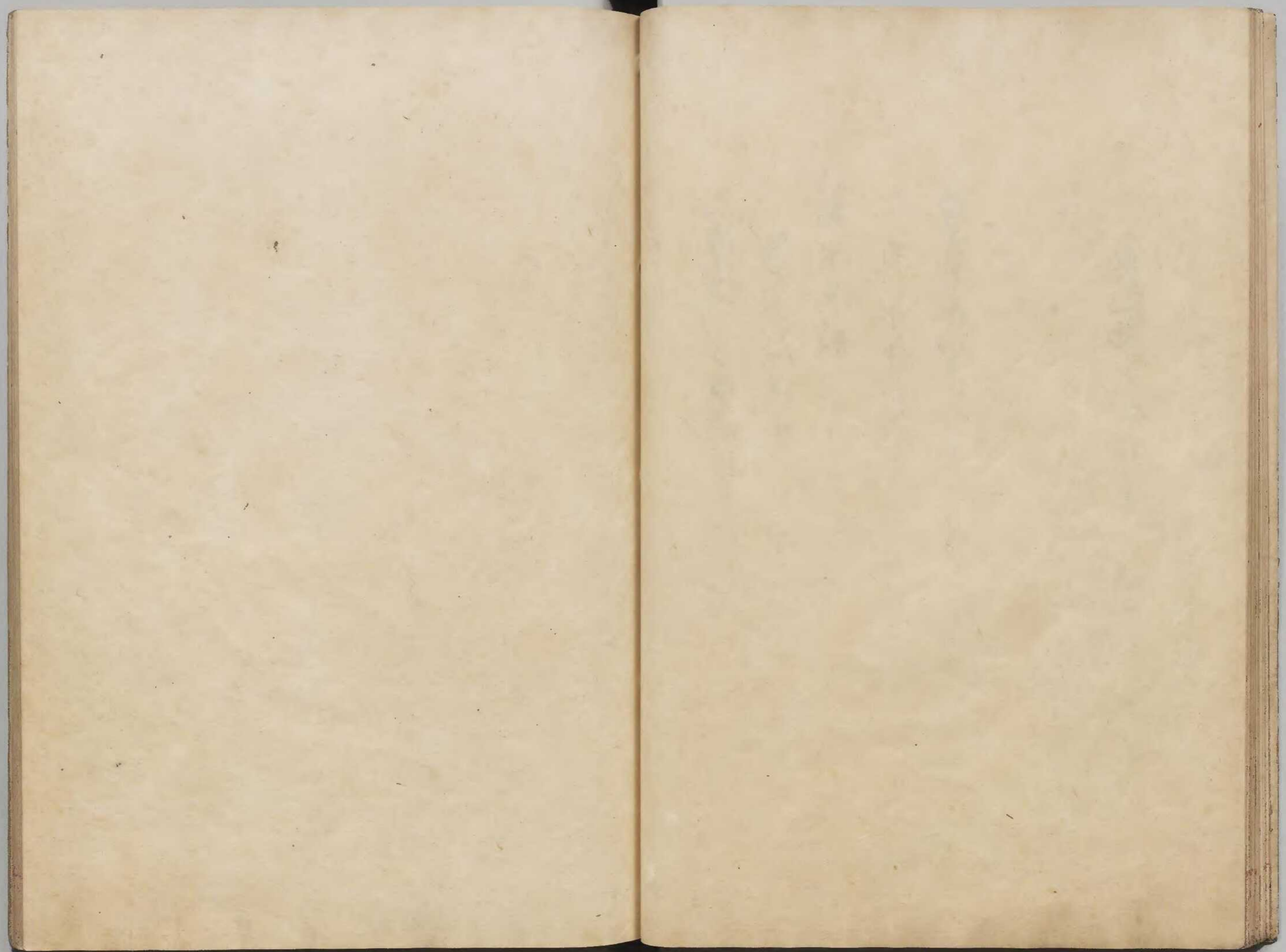
同元二年三月廿日神め

台漣院殿へ出さる

寛永十三年十一月古

將軍家とある

家紋神八松皮菱 後上割菱高野



田山 いりやま

● 系 けい

左系

出園信列 しゅえんしんりつ

右明 みぎあき

左系

出玉用系 しゅぎよくけい

菅田大膳 すげだいたぜん 左系 康貞 やまざね 小属 せうぞく 寸康 すんやま 貞治 さだち 人 ひと

なり周系法陣の対名明
東照大権現へ石出さしお福一なるも後
名法院殿し流し人なり

永清

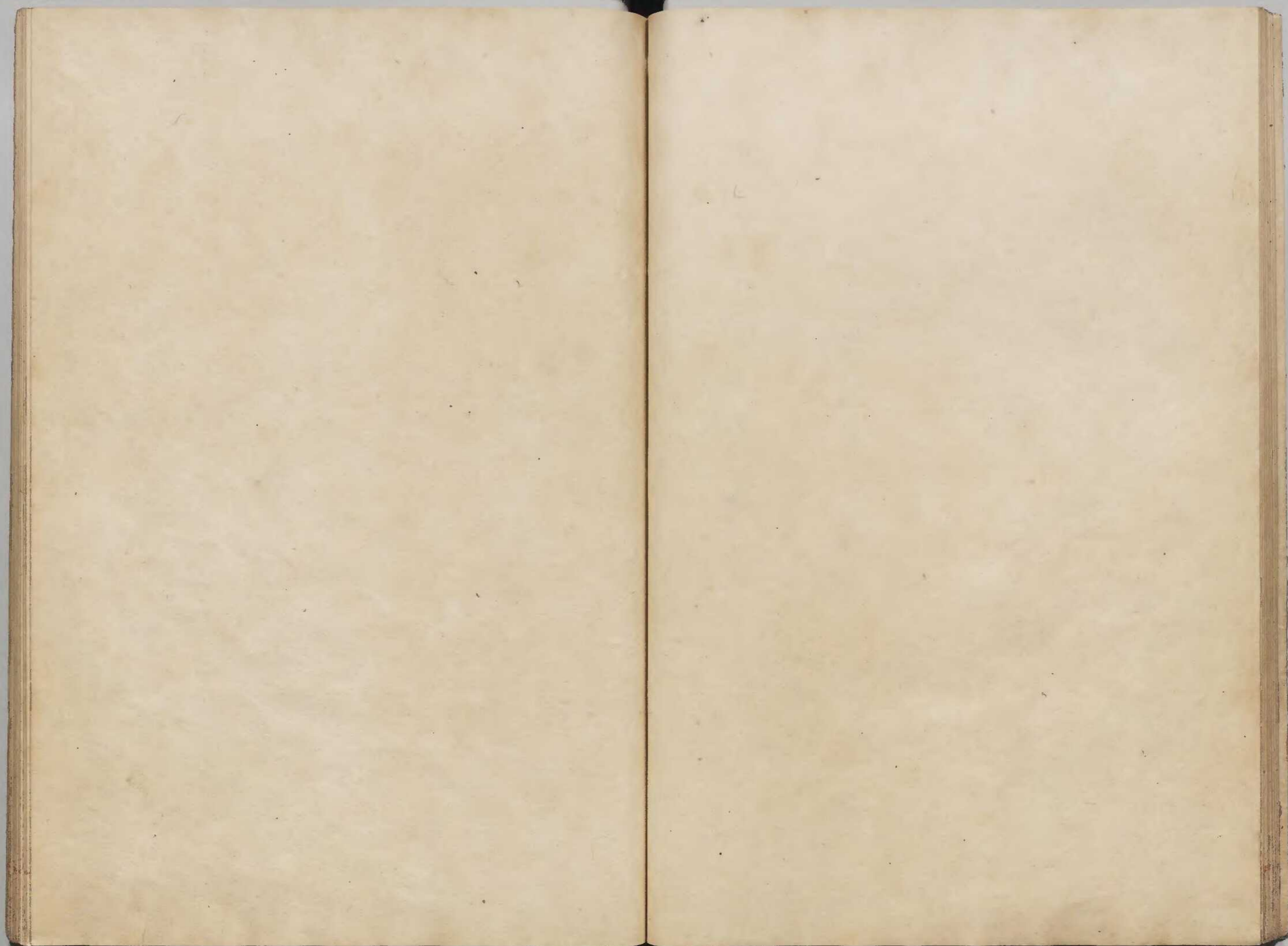
七步清

生五と野

實ハ安るニ在清ハ國重ク子なり幼ガリ
祖父在系ク喜子ク行クニ後名明ガ子
ナリコトナリ永清ニ在流シトナリ

將軍家へ石出され流し人なり

家紋松皮反菱



貞次

安昌やすまさ之左衛門 生玉甲斐

常葉つねは後河与ごご範貞のりさだが末流しんりゅう後ご安昌やすまさと

称号しょうごうと寸常すんじょう系けい八平はちへい氏しなり

武回ぶかい信虎のぶとら信玄のぶのぶ父子ふちと流りゅう人ひとと是こゝ柳やなぎ大おほ

乃すなはちなり信列のぶりつ若光わかつくとよおゆ信長のぶながと

謙信けんしんと合戦くわせんの時とき討死うちしす

信玄の信元の子
信玄の信元の子

信玄の信元の子
信玄の信元の子

貞次

安昌ちんの太夫つ 生玉甲斐

常葉じょう 後河与軌か 貞まこと 未流みやま 後ち 安昌ちん と

称号しょうごう と寸常葉すんじょう 平氏へいし なり

武回ぶくわい 信虎のぶとら 信玄のぶひこ 父子ふし 一ひと 流なが 入いり 是こゝ 信元のぶもと 大おほ

物もの たり信列のぶりやう 吾光われひかり ちよおのろく信長のぶなが と

謙信けんしん と合戦くわせん の時とき 討死うちし す

貞國

三太夫

生玉用名

信玄後頼父子に流し入ると登松井田

走山曲輪とまもり足輕大將となる

天正十年甲別没落の後貞國信列

旧領の地を領しむと死

大権現軍士と引かき新府城にうつた

まよひた貞國若田を逃つた其康貞

屬して忠切とくびます康貞浪人分後

井伊を敵か悔並政とあこころ

を又十八年江別江和山とおかき病死

國重

三太夫

生玉上野

若田康貞没落の後上別小おかき死

永清

ながひら

七五清

生

玉

上

野

ながひら

家の松皮木菱

このしんまのひら

山中 やまなか

先祖代々甲列郡為郡山中北城
居恒より山中と称號とす

系 き

庶助 しよのすけ

生玉甲装

分次 ぶんじ

下野 しも

生玉同外同山中北城小守

武田信昌より信虎小治ふ

外秀

弟作

生國同家

武田信虎小治ふ

外播

義浩

生國同家 深津城より

武田信玄小治ふ

天正十八年九月より辛七某少く死す

法名道心

外行

主水

生國同家

武田信玄より勝頼没落の後

東照大権現甲列御入玉の時

流人なり

天正十二年長久手合戦の時流人

歌陣うたじゆん小こおのの首かみ二級にきゆうと討うちらるる歌うたの歌うた
二人ふたりとといいけけどどり

同十九年奥列おくり法陣ほふじんの時とき岩いわをを次つぎにに討うちらるる
位ゐりりてて氷こほりをを切きりりてて在あるる事ことととすす
是このこ二に年ねん四よ月げつ廿にじゅう九く日にち武ぶ列り小こおのののをを討うちらるる
四十九歳よんじゅうきゅうさい法ほふ名な壽す清せい

女メ童童

与九郎 左ひだり太た夫と 生國なまくに同どう前まへ

天正十九年

大権現おほいけんげんとと名なをを一ひとつつととすす

同年奥列おととしおくり法陣ほふじん小こおののの後のち

名な法ほふ院いん殿のり

乃軍家のりぐんけへへ討うちらるる事ことととすす

寛永十二年十二月廿五日武列ぶり小こおののの死しす
五十八歳

女メ政政

与九郎 生玉回糸

台津院殿

將軍家へ送るへ事

元和七年十一月廿四日病歿二十七日

常義つねよし

与五右衛門 生玉後列

寛永七年六月

將軍家へ送るへ事

重之ちかゆき

源左衛門 生玉武義

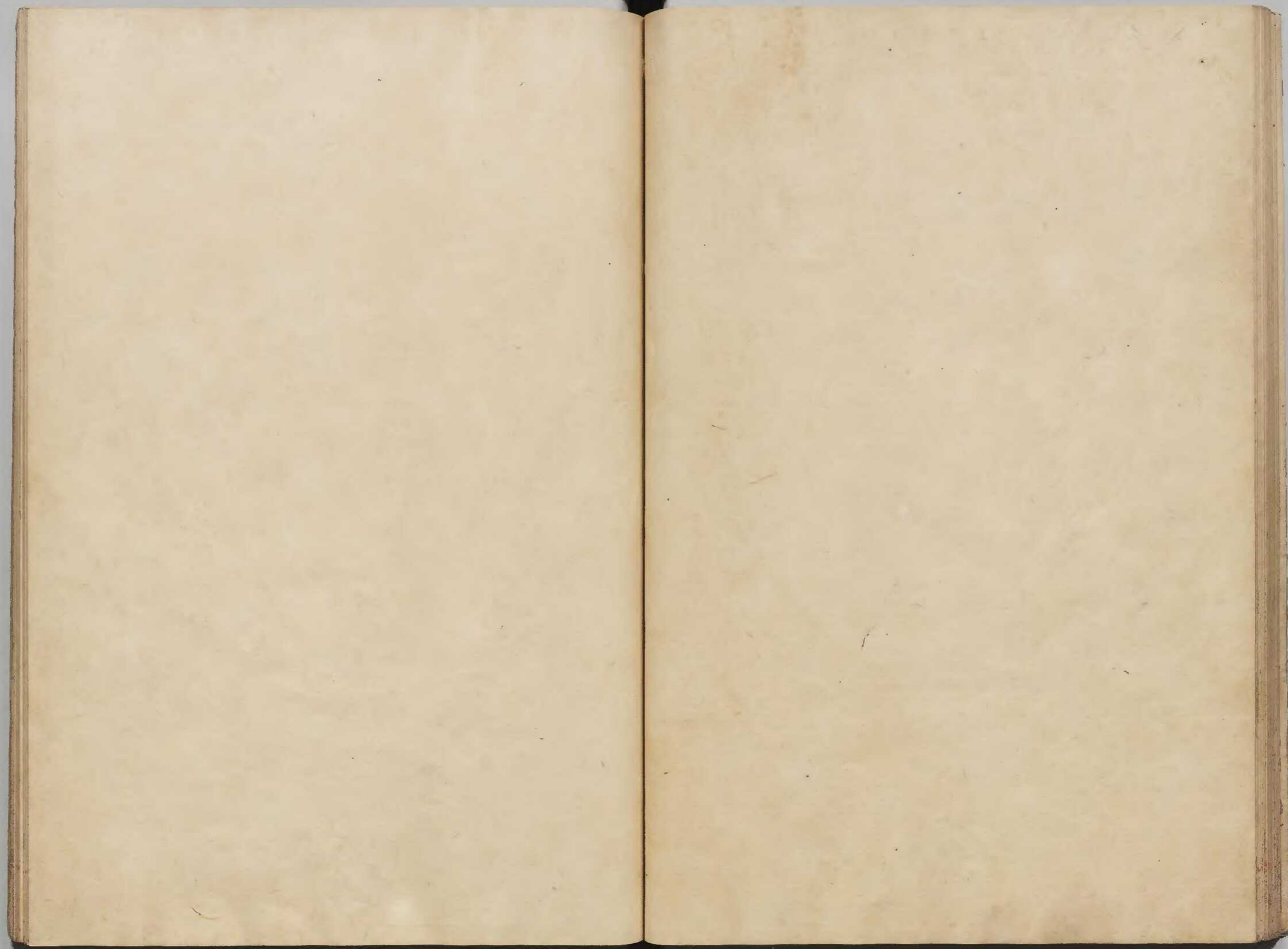
元和八年

台津院殿

將軍家へ送るへ事

常義家級 乃の目小裏鏡

重之家級 松皮巻



窪田くぼた

正後しょうご

孫左衛門

生玉甲列なまたまがら法名ほなな意安いあん

成田孫右衛門なりたのまご

天正十年

東照大権現甲列とうしょうだいこんげんがら（御出立の時ごでだちの時に）出され

有あ福寸ふくすん

正成 まさなり

源五

生玉同家

おややきん
法名宗安

大権現

台漣院敬小法久くとそまり家

正次

新屋海門

生玉同家

台漣院敬

將軍家へ法久くとそまり家

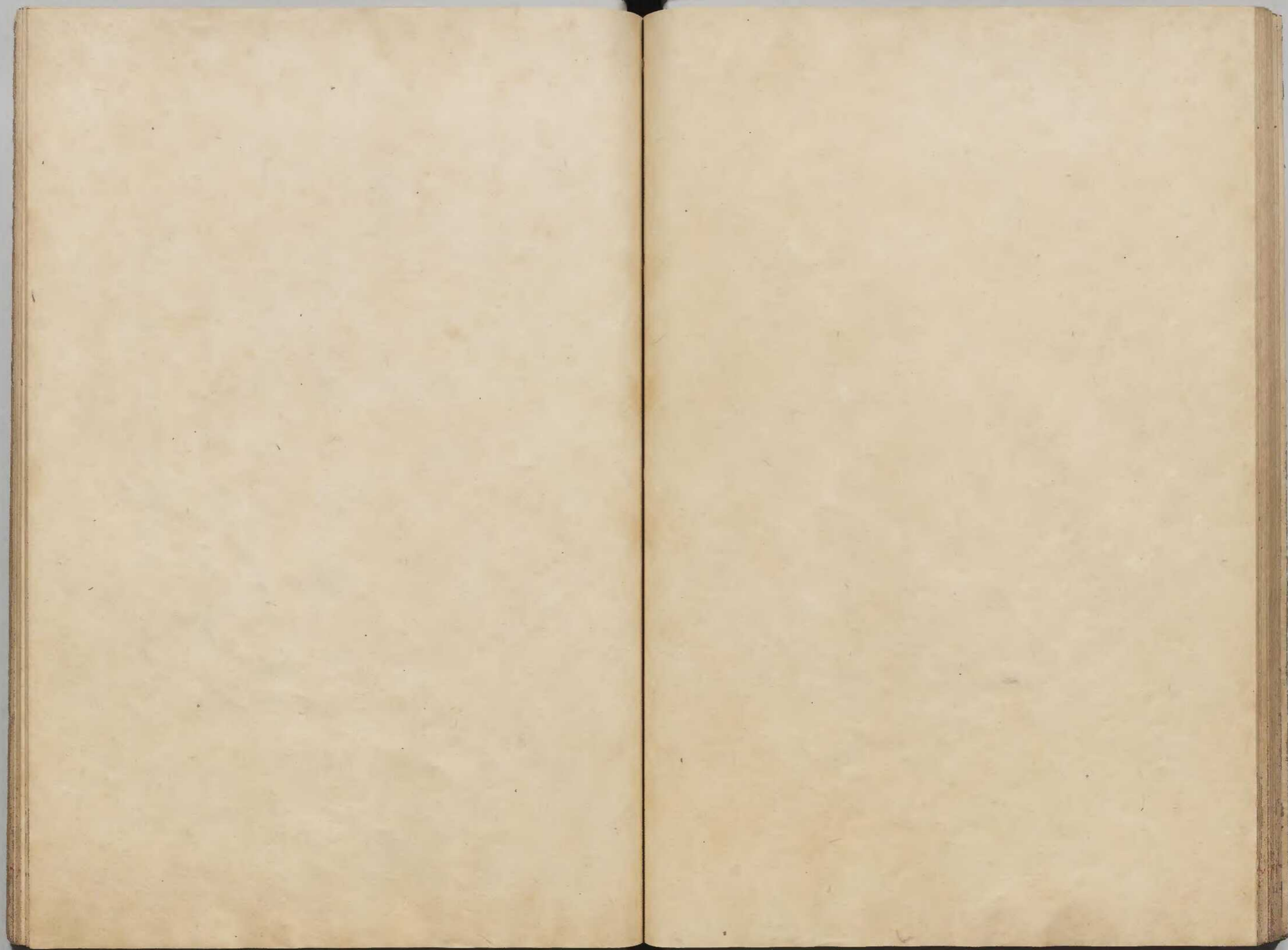
實まことの横屋よこや劫あや奪うつ子こなりり正成まさなり御ごなりて

子ことす横屋よこや劫あや奪うつ子こなりり生玉なまたま甲か列れつ横屋よこや官くわん同どう

法名ほふな道悦みちえつが子こなりり道悦みちえつの生玉なまたま同どう信しん玄げん家け

臣おみなり

家紋松皮菱



● 忠次

日比野ひびの

初はつ村井むらゐ氏うぢなり

村井むらゐ大おほ学まなぶ 生なま必かなら信まこと列り

小笠原おがさわら氏うぢ小笠原おがさわら没落ぼつらくの後のち

小笠原おがさわら安やす藤ふじ氏うぢ小笠原おがさわら村井むらゐととつつて

日比野ひびのとと長なが寸すん足あし種むね大おほぬぬととななららくく軍いくさ切きり

何なにもも小こよりより感かん伏ふくををささししるる

越後陣のり討死

忠安

大學

生玉上列

心象安流馬し流ふ女流馬没落の
後酒井非主以忠世し流ふ上列におか
て病死

忠重

八多清

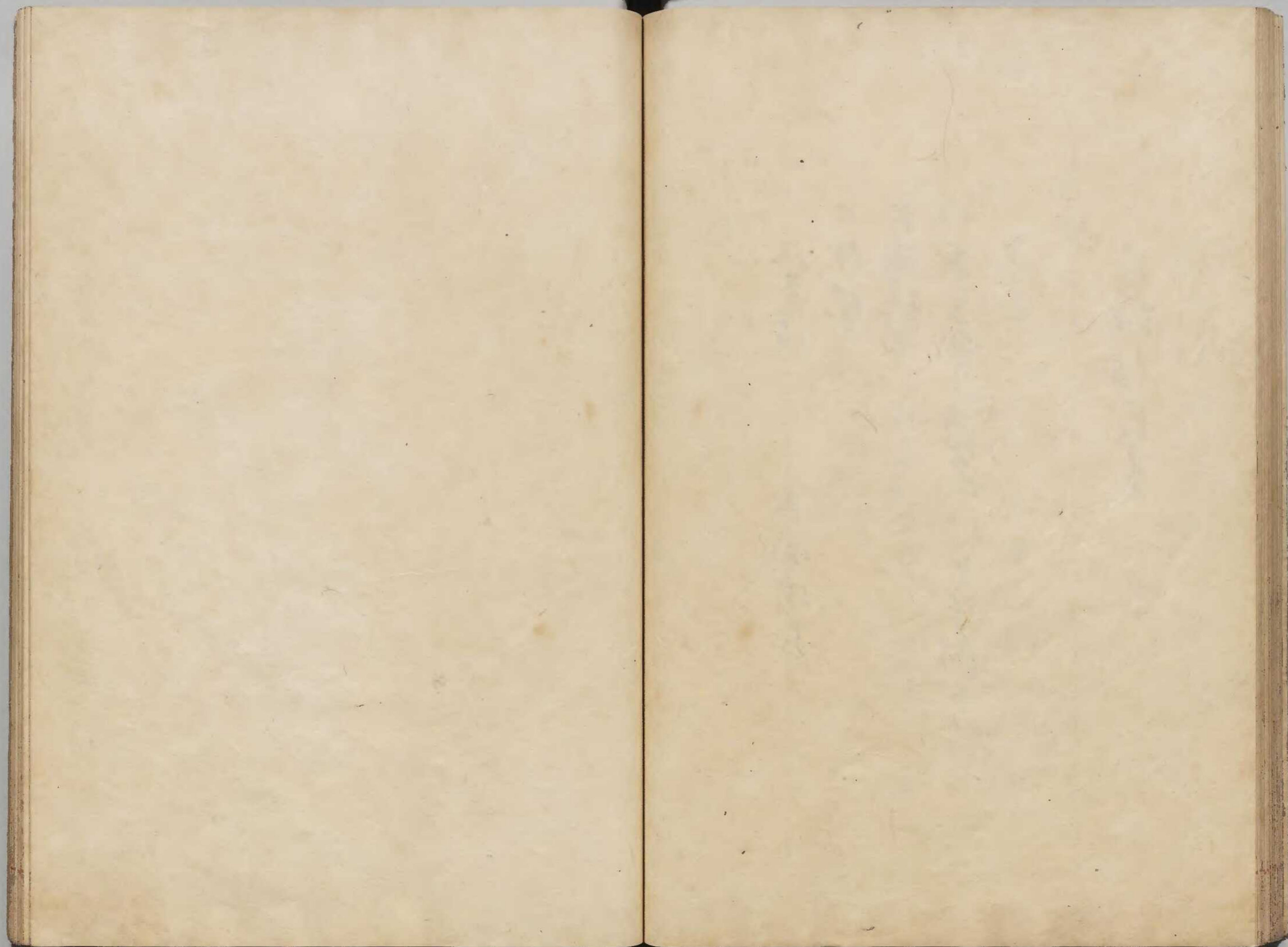
生玉同列

大権現

台津院殿

將軍家し流ふしそま川ふ

家紋杉皮書



今井 いまい

昌也 まさや

民部 たみべ

生玉甲斐 なまたまがひ

武田信玄 たけだのぶひら

永禄四年九月川中湯合戦の時 えいりく四年九月川中湯合戦の時

昌吉 まさきち

左衛門 さゑもん

生玉同前 なまたまどうぜん

武田信玄後頼父子と清久

天正十年

東照大権現甲列法入念の時石出と書

お湯寸

昌安

九多邊

生玉同お

大権現

台徳院敬

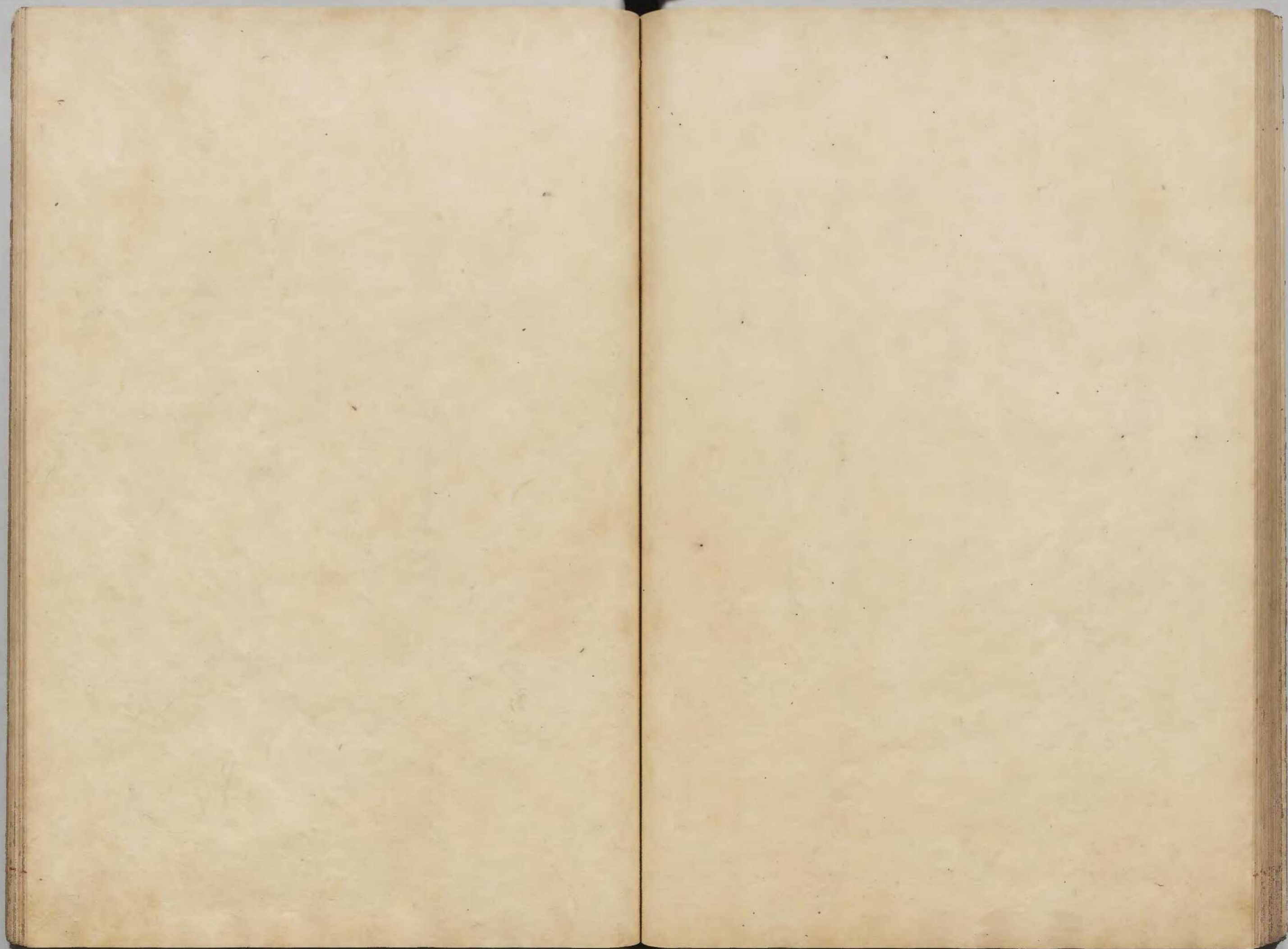
將軍家と御湯一書

忠昌

八郎左衛門

家紋所の目松皮書

まろりり



● 兼負かねぢ

今井いまい

四郎兼平しろうかねへいが末流すえりゅう

老老通門村

判發はんぱつして宗久むねひさと号す

法親ほっしん 生玉和泉なまたまわいみ

信長のぶながより流れて橋列はしりゅうよおわく地ぢ二子ふたご

二百石ふたひゃくいしと流りなが

兼久

帯口

宗薫

生玉月あ

父兼久を云ふはくく二子三百名のうら

千二百名秀を云ふはくくのころるを

秀を云ふはくくはくく秀を云ふはくく

縁を云ふはくくはくくはくくはくく

東照大権現の命より政宗は甚母と忠輝

へ縁を云ふはくくはくくはくくはくく

時の五まりお歳して宗薫一人が樹と申

なすともいふも二刻首尾よく清きと

勅より上り聞が東清陣の時清きと

かきしき三百名は内お坊よりて都合千

三百名と相成す

大権現れ命と云ふはくく和泉河内あく清代

友と勅む

大坂一札のうら河相帝正なるは増政宗

采山小若清と宗薫下りせ和泉の増と

まのりつゝあ

大権現へ御参りとおつゝ心なまじり

大坂へいそぐえすから系譜系譜父子大

坂上石ころのし家城志没收せらるる

うへ大坂どのくれおのとき

大権現の魔下とあつゝふまう三た相成紙と

いふととんども

大権現とあつゝいそぐ大坂陣れ侍を

兼隆

平尾藩の村 生玉田あ

台津院殿

將軍家とあつゝ

此地がしつゝ御代友系譜系譜田あ

あつゝつけらる

魚續いしづ

香太清の尉 生玉同家

お軍家とある為いしづ一なり魚隆いしづ同家いしづの地いしづ

がび小沖いしづ代友いしづ取と 仁村いしづ

家紋の用いしづ捨扇いしづ

高室 たかしむら

● 家次 いえつぎ

平右衛門
武田信虎より

生田甲斐
法石通達 しやうせきつうだう

久家 ひさけ

考案

生田同前
法石通達 しやうせきつうだう

武田信玄猶如父子不許不

昌重

武田勝頼 生玉田家

武田勝頼不許不

天正十年

東照大権現甲列沖入玉の時又次也

おもしろい石出されお福一暮らし

台酒院殿

將軍家へ流るるをそま川家

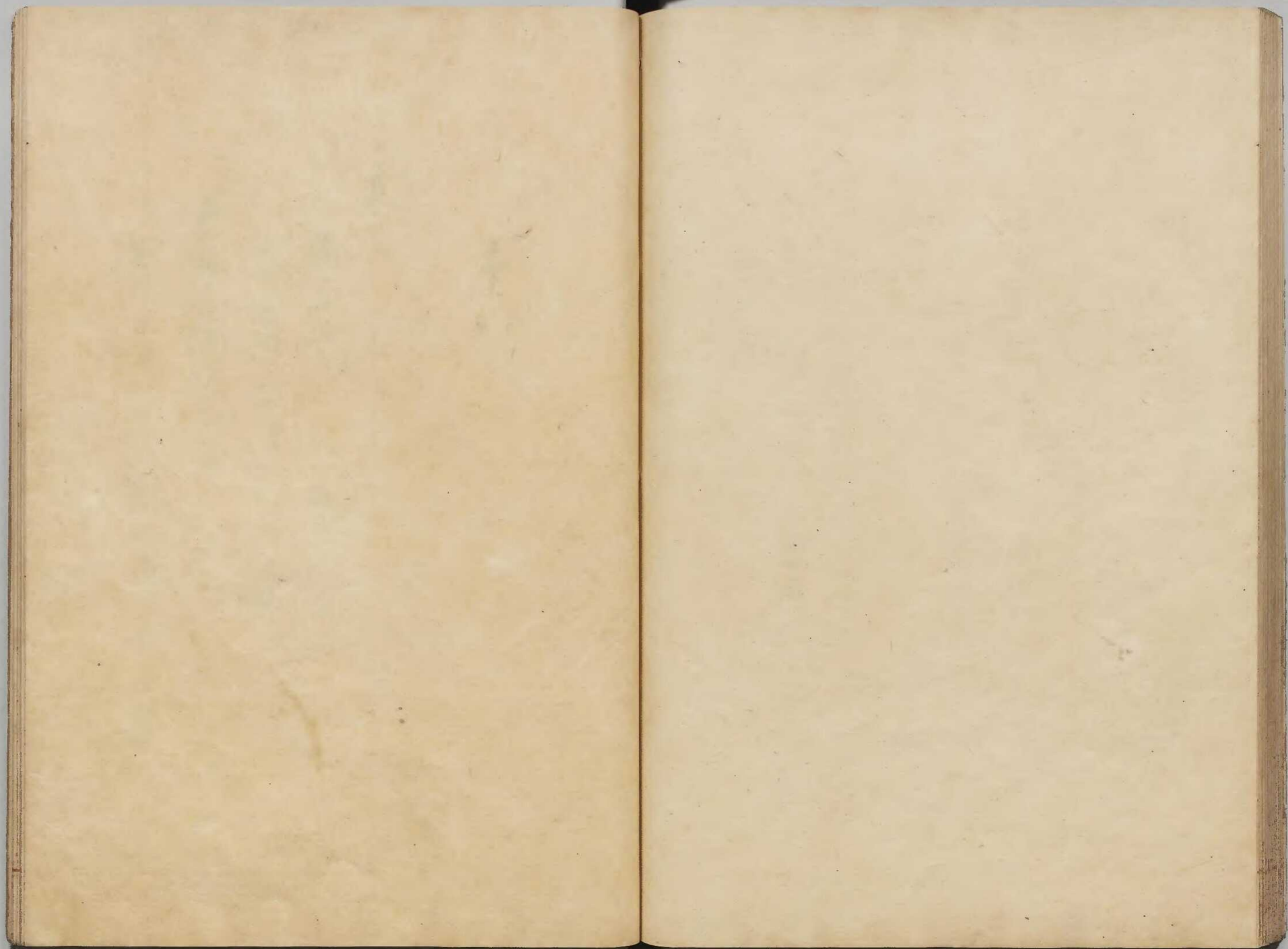
昌成

新二郎 生玉武家

台酒院殿

將軍家へ流るるを

家紋 松皮菱



市川

系

清右衛門

出玉三河

廣忠卿上流久平後

東照大権現上流久平

安永六年病死時上七十歳

信次

清左衛門

出玉後列

大権現

台酒院殿

將軍家上流之人也

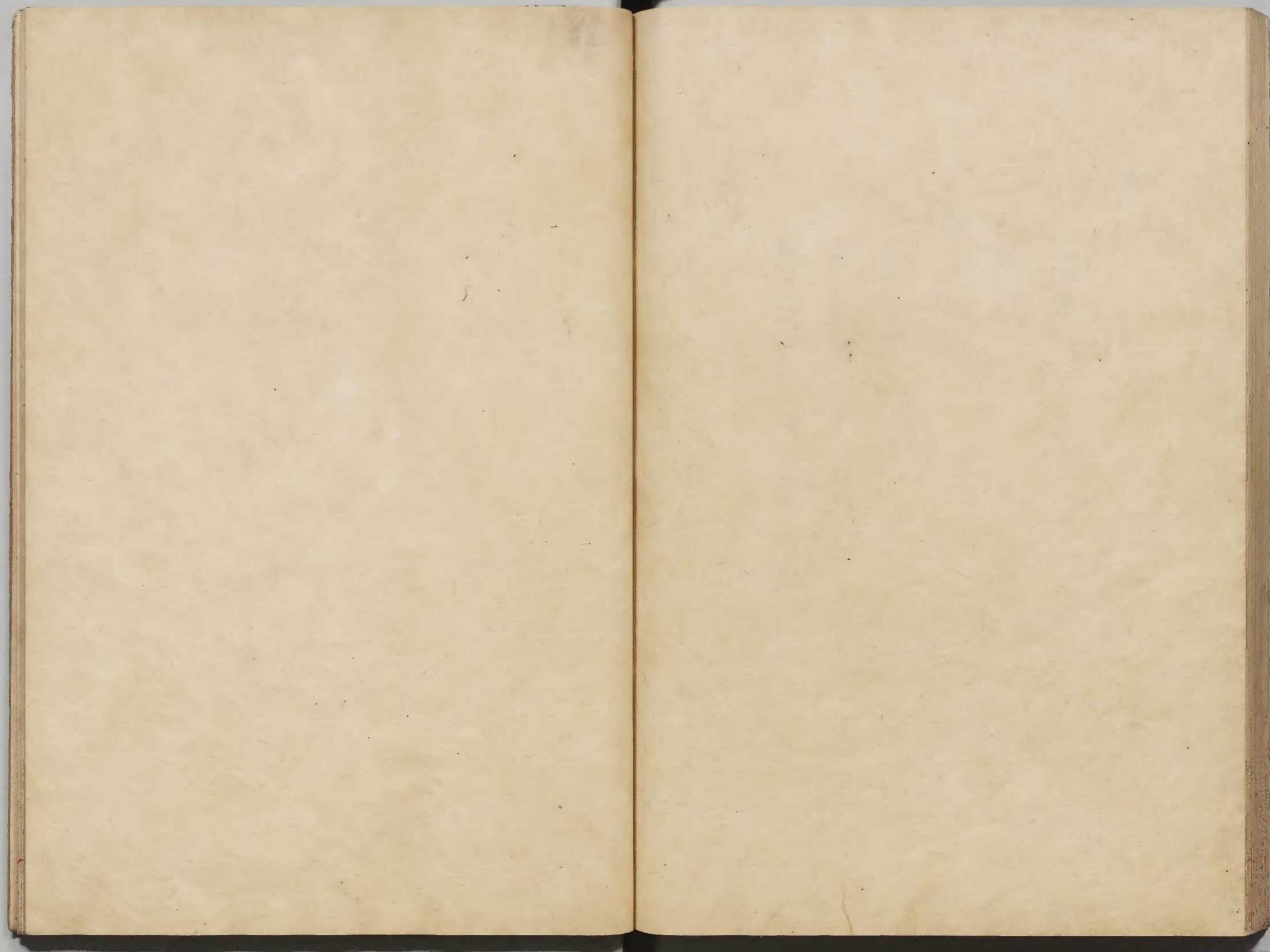
寛永十七年五月庚子病死河上

六十歳 法名了悟

正次

若之郎

出玉武列 江戸



市川

系

油後守

生玉甲斐

袖めは信虎信玄物頼之代上流

うたぐら

東照大権現へは公され相傳守

歳八十三あり病死

系

内膳正

生玉目家

信玄掛杉上流人長瀬合戦の時

討死

海友

後左衛門

生玉目家

天正十四年

大権現小舟場しんげんこぶな一いち等ら

小田原奥列國おだわらおくりく系けい三さん所ところ北きた陣じん

信玄しんげん一いち等ら

台酒院殿上流人たいしゅえんどのじゆりやうじん等ら大坂おさか度たび北きた

陣じん上じやう流りやう人じん等ら

將軍家上流人しやうぐんけじやうりやうじん等ら一いち等ら

寛永十四年病死六十六歳

友昌

茂左衛門

五五武彦

寛永十年

將軍家上流人々々々々々

家級まがひ松皮まがひ菱

市川

定友

加頃

生田氏

北條家より流るる武列小山田内大森村
三橋村より流るる文禄元年より流るる
定友より流るる領地寸
流るる道連

定信

第1

生玉同家

小幡氏政より流るるを列二方系合戦
此より信奥より信玄へ加増と
してを友也阿多馬五十騎より一こころ
より内よりりりて教向して二方系より
討死 流るる者同

定信

孫右衛門尉

生玉同家

父定信討死の後定信知かなりと
とも小幡氏頼より流るる小幡系頼
とむ

をもちえはた公保石見守に属し十七
年の月即代友と勤む

同十八年

台徳院殿へりし出され

將軍家といふまゝに流るる

家紋丸の目と沃わく浮うき

五十嵐

茂政

久吉衛

東照大権現

台徳院殿

將軍家上御一途之書

生五下総

常廣 のろ

仁孝清門 生五二列

實た小のろ原のろ保のろ信のろ門のろ高のろ廣のろ子のろなり

寛永二年

台漣院殿

將軍家へ流るなり

同十七年二十五歳少く病死以名澤貞

廣文 のろ

仁孝清

生五武列

家紋松皮菱

系 のろ

小原保馬守 生五二列

大権現のろ命のろありて小原保母波守のろ継のろ子のろなり

一て流るなり 病死七十歳

た
ひろ
高
廣

傳左衛門

生玉河家

寛永二年五十二歳少く病死

